恋に狂い咲き

1　心が求めるもの　～真子～

「今回も駄目だったね」
友達の島津奈々子の言葉に、芳崎真子は申し訳ない気持ちで頷いた。
合コンの帰り、ふたりで最寄りの駅に向かっているところだ。
ほんのり紅色に染まった頬に冷たい夜風を受け、真子は身を震わせた。もう四月の頭とはいえ、まだまだ寒い。隣を歩く奈々子も、春物のコートの襟を立てている。
「ごめんね」
「なんで謝るのよ」
「だって、奈々ちゃんがせっかくセッティングしてくれたのに……また期待に応えられなくて」
「馬鹿ねぇ。何言ってんのよ！」
言葉とともに、バチンと背中を叩かれた。
「な、奈々ちゃん、痛いよぉ」
「あんたが馬鹿なこと言うからよ。こういうの、期待に応えるとかじゃないし。ピンとくる人がいなかったんだもん、仕方ないじゃん」

「う、うん……そうだけど」
真子は二十三歳。現在彼氏いない歴を年齢とともに更新中だ。姉御肌の奈々子は、そんな真子を不憫がっているようで、度々合コンをセッティングしてくれる。だが、うまくいったためしがなかった。もちろん素敵だなと思った人もいる。そんな人に声をかけてもらったりもした。けれど、どうしても首を縦に振れない。……こんなことじゃ、一生独身かもしれないなぁ。
「ほらほら、落ち込まないの。そのうち、あんただけの素敵な彼が、白馬にまたがって、颯爽と現れるって」
奈々子らしい励ましに、真子は声を上げて笑った。
奈々子は真子より二つ年上。専門学校を出て入社した真子と、大学を出て入社した奈々子は、同期入社だ。そのため、年の差を感じることなく友達付き合いをさせてもらっている。
「白馬の王子様を待ってるつもりなんか、ないんだけどなぁ」
夜空に向けて呟く。
「わたし……えり好みしすぎなのかな？」
「そうじゃないって」
「そう？」
「うん。好きになるときには、理由なく好きになっちゃうもんなの。どうしてこの人のことを好きになっちゃったんだろうって思っても、好きになっちゃったら……もうどうしようもないしさ」
肩を並べて歩きながら口にする奈々子の言葉には、実感がこもっている。

それは、いま一緒に暮らしている彼氏さんのことを言っているのかな？
大学院生で一つ年下の彼と同棲していることは知っているけど、会ったことはない。
「つまり、恋する気持ちには、なんぴとたりとも、抗えないのよ」
奈々子は力強く締め括った。
「羨ましいな」
「うん？　羨ましい？」
怪訝そうに問い返され、真子は笑った。
「羨ましいわよ。わたし、そういう気持ち、まだ味わえてないもん」
「う、うーん……」
真子の発言になぜか、奈々子は頭に手を当てて唸る。
「羨ましがられても……微妙だわ」
「一度も恋をしたことがないわたしには、羨ましいわよ」
肩を落としている真子を、奈々子は神妙な顔で見つめてくる。
「奈々ちゃん、どうかした？」
「いや。あんたが恋に落ちる人は、どんな人なんだろうなと思ってさ」
わたしが恋に落ちる人？
「どんな人なんだろう……どこかにいるんなら……早く、逢えたらいいな」
「真子……あのさあ……野本さんとは、どうなのよ？」

「奈々ちゃんってば……また」
「だって、野本さんと真子、すっごい仲良いじゃん。野本さんも、絶対あんたのこと悪く思ってないのにさぁ」
　同じ職場に勤めている野本拓海。
　彼は半年ほど前、キャリア採用で入社してきた。とても有能でハンサムな好青年だ。当然社内でも一番人気。奈々子の言うように、拓海とは仲良くしているけど、彼は誰に対しても分け隔てなくやさしい。真子とだけ、特別仲がいいわけじゃない。
「顔もスタイルも性格も、文句のつけようのない人なんだけど……あっちこっちに、いい顔しすぎなのが難点だよね」
「奈々ちゃん、そんなふうに言ったら、野本さんが可哀想よ。いい顔しすぎとか……やさしい人なんだもの。それに、モテるのは仕方ないし」
「まあねぇ。けど、真子を見る眼差しは、特別な思いがこもっているとしか思えないんだけど……よくわからない人だわ」
「奈々ちゃん、何度も言ってるけど、わたしにもその気はないわよ。野本さんのことは好きだけど、友達だから」
「えーっ、そんなもったいないことを」
「それじゃ、奈々ちゃんは、野本さんに告白されたら付き合うの？」
「わたしはすでに彼氏持ちだもん。まあ、野本さんのことはいいや。それで、次はいつやる？」

「それって、合コンのこと？」
「うん。もう男性グループの目星はついてるの。だいたいのセッティングはいつもの如くだし、あとは予定を合わせるだけ」
「奈々ちゃん、そんなに合コンばっかりやってて大丈夫なの？　彼氏さん、怒らないの？」
「そっちの心配は無用だって。真子の彼氏をゲットするまで頑張るの。……それよりわたしは、野本さんにばれることのほうが怖いよ」
「はい？　なんで？」
「あんたを合コンなんて安易な男女の出会いの場に連れて行くなって、釘を刺されたのよ」
「はあっ？」
「金曜日に、わたしらが合コンの打ち合わせしてたのを、小耳に挟んだみたいなんだよね。連れてかないって約束させられた。結局連れてきたけど……あはははは」
　本人を抜きにしたその約束はなんなのだ。
「それなら自分が真子を誘えばいいのにさ。ほんとよくわかんないわ、野本さん。小心者って感じでもないのにね」
　真子は奈々子同様内心首を捻った。
　拓海は真子を恋愛対象として見ていない。それははっきりと、彼から伝わってくる。
「野本さん、友達として心配してくれてるんだわ」
「友達ねぇ。あのさ……野本さんがやって来てから、真子を誘う輩はいなくなったよね。ちょっか

いかけてくるやつら、それまではうざい程いたのに……」
「何が言いたいの？」
「野本さんが、睨みをきかせてるって噂だよ」
真子は噴き出した。
「ほんとだってばぁ」
真子は笑って聞き流しながら駅の構内に入った。
ふたりはここで別々の電車に乗る。唇を尖らせている奈々子に手を振り、真子は彼女と別れた。
電車に揺られながら、真子は虚しさを感じていた。
心を満たしてくれる、そっと寄り添いたくなる人がいたらいいのに……
いつまで経っても、そういう人は現れない。この先も現れない気がした。

アパートに着いた真子は、写真の中の母親に、「ただいま」と声をかけた。母の真澄は、飾り棚の上の写真立ての中で、やわらかな笑みを浮べている。
母親が死んでしまってから、すでに十二年が過ぎている。真子は父親を知らないし、母方の祖父母もすでに亡くなっていて、血の繋がった親戚は遠方に住んでいる叔母の凜子ひとりだけだ。
凜子は、もちろん真子の父親を知っている。だが、母と約束したからなのか、父のことは話してくれない。凜子が教えてくれたのは、父がかなりの資産家だったということくらい。どうやらそのせいで両親はうまくいかなかったらしいのだ。そのため叔母は金持ちに対して、物凄い偏見を持っている。真子は、叔母と同居していた数年間、決して金持ちの男は相手にするなと釘を刺され続けた。まあ、お金持ちどころか、そもそも付き合う相手がいないのだけど……
真子も、お金は必要なだけあればいいと思っている。必要以上のお金は、かえって人の心を貧しくしてしまうように思えるのだ。人の心を満たすのは愛だ。愛した人とならば、どんな生活でも満足を得られるだろう。
服のボタンを外しながらクローゼットを開ける。衣装ケースから寝間着と下着を取り出した真子は、ケースの隣においている籐のバスケットに触れ、蓋を開けた。
バスケットの中には、手紙がぎっしりと詰まっている。
これは、母が父に宛てた手紙。母が亡くなってから見つけたのだ。
手紙には住所も苗字もなく、ただ『真治さんへ』と書いてある。けれど、ちゃんと切手は貼ってある。その切手を、母はどういう気持ちで貼ったのだろう？
母の気持ちを思うと、どうにも胸が切なくなる。
お父さんのこと、こんなにたくさん手紙を書き続けるほど、愛していたんだろうなぁ。
けど、お父さんのほうは違ったんだわ。
そう考えると母が不憫でならない。届かない思いを、手紙に書き続けていたなんて……
お母さん、寂しかったのかな？　わたしがいても……
わたしは、お母さんがいてくれれば、充分しあわせだったのに。
そう思うと、ちょっぴり父が憎らしくなる。母に寂しい思いをさせて……いまごろどこでどうし

ているのかしら？　それでも、不幸であればいいとは思わない。わたしがそんな風に考えてしまったら、きっと母をひどく悲しませてしまう。母には天国で笑っていてほしい。

真子は、一番上の手紙を手に取った。開封して読みたい気持ちもある。だが、これは父に宛てた手紙で、母は父以外の人の目に触れることを望まないだろう。

手紙はこの先も、封を解かれることはないんだろうな。わたしが年を取って、死を迎える前にでも、燃やしてあげるのがいいかもしれない。

真子は、感傷的になりすぎている自分に気づき、苦笑した。

なんらかの事情で離れ離れになってしまったけれど、母は父に出会い、恋をして、一度は結ばれたのだ。それはきっとしあわせなことだ。

手にした手紙を戻し、真子はバスケットの蓋を閉めた。

シャワーを浴びた真子は、そのままベッドに転がる。自分の立てる音以外、物音ひとつしない部屋。

天井を見つめているうちに、ひどく虚しくなってきて、真子は身体ごと横に向いた。

視界が狭まったぶん、心の隙間も小さくなるような気がする。

ひとりは寂しい。寂しい、寂しい、寂しい……

じんわり涙が湧いてきた。涙の雫が枕を濡らす。

人のぬくもりが欲しい。わたしだけの、わたしのためのぬくもりが……

胸が耐え難いほど震える。

そんなもの、きっとこの世に存在しないのだ。

そう自分に言い聞かせながら、真子はそっと目を閉じた。

◇　◆　◇

「芳崎さん」

仕事がひと段落つき、背を伸ばしてふっと息を吐いていたら呼びかけられた。声の主は拓海だった。彼の席は彼女の隣。真子は、拓海の補佐をしている。

「はい」

「そろそろ昼になるけど、君は今日もお弁当？」

「ええ。もしかして、野本さんもお弁当なんですか？」

つい、からかいを込めて聞いてしまい、拓海が渋い顔をする。

いつだったか、拓海がとんでもなく手の込んだお弁当を持ってきたことがあり、そのお弁当のことが、いまでもこの部署の語り草となっているのだ。知らない間に嫁さんをもらったのか、と同僚の松野圭太や吉田課長からもからかわれて……まあ、見ているぶんにはずいぶんと楽しかったのだが。

「それはもういいだろう。芳崎さん、君、案外意地悪だな」

やさしい微笑みを絶やさない好青年である拓海の、むっつり顔は珍しい。
わたしより三つ年上の人なのに、こういう表情をすると可愛く見えちゃうな。もっとからかいたくなるけど、本気で怒っちゃうかな？　野本さんが本気で怒るところなんて見たことがないし、想像もつかない。……実際、怒ったりするのかな？
「芳崎さん、どうかした？」
知らず彼の顔を見つめていたらしい。拓海から戸惑ったように声をかけられ、真子は照れて首を横に振った。
「あんなお弁当を作ってもらえるなんて、素敵だなって思って……」
「それ、本気で言ってる？」
「言ってますよ」
「けど、口元が笑ってるぞ」
むっとした顔で、拓海は真子の口の端を指で押さえてきた。一瞬驚いた真子だったが、別に嫌ではなかった。くすくす笑うと、なぜか拓海のほうが、しまったという顔をして、さっと指を引いた。
「ごめん」
ぼそりとした声で拓海は謝ってきた。
「そんな、気にしなくても、大丈夫ですよ」
笑いながら言うと、今度は顔をしかめる。あっ、これは失言だったかも。
「芳崎さん、そんな簡単に許すべきじゃない」

うわっ、やっぱり始まった。
「男はすぐに調子に乗るものなんだから……特に、合コンなんかでそんな態度を取っちゃ絶対に駄目だぞ。勘違いさせるからね」
やれやれ、また小言スイッチを押してしまったようだ。拓海は油断するとすぐ、生活指導の教員のような小言を言いはじめるのだ。
「合コンなんて、もう行きませんし」
「ふーん、昨日の夜、君と島津さんが何をしていたのか……小耳に挟んだけどな」
「ええっ！」
思わず声を上げてしまい、真子はハッとして口を押さえた。もうすぐ昼休みとはいえ、まだ仕事中だっていうのに……
「そんなに驚かなくても、ここのミスは、今日中に直してくれればいいから」
拓海が上手いこと、フォローしてくれる。
「は、はい。すみません」
真子はぼそぼそと言い、誤魔化しに適当なファイルを取り上げて開いた。
拓海ときたら声を殺して笑っている。真子は顔を赤らめて、彼を睨んだ。
それにしても、拓海の豪華なお弁当、きっと彼の母親が作ってくれたのだろう。
お母さんの手作りか……羨ましいなぁ。

「それじゃ、コンビニまで昼飯を調達に行くふたりを決めるとしようぜ」
奈々子と拓海、そして松野と顔を突き合わせ、真子は真剣にじゃんけんに挑む。弁当は持ってきているが、飲み物が欲しいので、じゃんけんに参加することにした。
この会社の近くにはあまり飲食店がない。そのため真子のように弁当持参が大半で、あとは車で少し離れた店までランチを食べに行くか、会社の前にあるコンビニで買うかだ。昼時は混雑するし、品切れになりやすいので、なるべく早めに行かなければならない。
「じゃんけん、ぽん」
皆と声を合わせてグーを出したら、拓海もグーで、奈々子と松野がパーだった。
「あー、負けたぁ」
「はーい、ご苦労様。はい、真子、これお願いね」
奈々子がにやにやしながら、買ってきてほしいものを書いたメモを渡してくる。
「おふたりさん、早くな。俺の焼き肉弁当、売り切れる前に必ずゲットしてくれよ。頼むぞ」
「わかった、わかった。それじゃ、芳崎さん、行ってくるとしよう」
拓海と職場を後にしようとしたら、それと気づいた課長をはじめ、数人からさらに買い物を頼まれる。これもいつものことだ。
「もう注文のある人はいませんか？」
拓海ときたら、システム部の全員に聞く。
真子の勤めるアサミテクノは、社員数三百名ほどの会社だ。そのうちシステム部は、総勢十名にも満たない。正式名称は情報システム部だったが、誰も社内ではそう呼ばない。単純に略してシステム部、もしくはシステムと呼ばれている。会社の規模からすると人員は足りているとは言い切れなかったが、やりがいがあり、なにより部内の人間の親密さが真子にとっては心地よかった。
「おいおい、野本。いいから早く行けよぉ。俺の焼き肉弁当がなくなるだろう」
「わかったよ」
拓海は笑いながら歩き出す。先回りして紳士的にドアを開けてくれたかと思うと、そのまま真子の手を取る。どうも無意識のようだ。
「の、野本さん？」
「うん、何？」
「あ、あの……」
繋がっている手に視線を向けると、拓海はぎょっとしてパッと手を放した。
「ご、ごめん。つい」
ほんと、野本さんって面白い。天然なのか、なんなのか？
「野本さん、もしかして妹さんがいたりして？」
世話焼きなところを見ると、そうとしか思えない。
「あ……ま、まあね」
まごまごしながら、肯定する。
身内の話題って、照れくさいのかな？　それにしても、兄弟姉妹がいるなんていいなぁ。

「あの、芳崎さん」
「はい」
「その……色々と口うるさいことを言って、ごめん」
どうやら、小言を言ったことを、申し訳なく思っているらしい。
真子は、拓海を見上げて笑みを浮かべた。
「わたし、兄弟姉妹がいないので、心配して小言を言ってもらえるの、嬉しいです」
「……」
どうしたのか、拓海は真子をじっと見てくる。
「野本さん？」
「あ……う、うん。その……君は……あ、ああ、ちょうどエレベーターが下りて来るみたいだな。せっかくだから乗って行こうか」
拓海は真子の背中をぐいぐい押すようにして、エレベーターに向かう。
「ああ、はい」
真子は戸惑いながらも拓海に従った。部署があるのは二階だから、重い荷物を持っているのでもなければ、エレベーターは使わずに階段を下りるのが常だが……、いったいどうしたのだろう？
なんだか野本さんの様子、おかしいような気がしたけど……
まあ、気にするほどのことでもないか。

2　改革着手　～和磨～

パソコンのキーを叩く指を止め、朝見和磨（あさみかずま）は椅子に背中をあずけた。専務室だけあってその座り心地は申し分ない。油断をするとそのまま眠ってしまいそうだが、やることはいくらでもある。寝てなどいられない。
彼がここでの仕事を引き受けて、まだ数日だ。
この会社の社長がひと月ほど前に急死し、新しい社長が就任した。すると、この会社の現状が露（あら）わになったのだ。蓋（ふた）を開けてみれば、亡き社長はとんでもない独裁者で社内は問題だらけだった。
そうして新社長が改革に乗り出すことになったのだが、実務に忙しいため本人は指揮を執れない。そこでその役目を担う者として、白羽の矢が刺さったのが和磨というわけだった。
昨日の日曜日、一日かけて改革案の基礎作りをし、予定では今日から実際に形として始動させるはずだったのだが……
どうにも無理だな。諦めるしかないか……
昨夜は、ほぼ徹夜……一、二時間ほど仮眠は取っているものの、このところ睡眠時間があまり取れていなかったため、頭の芯がぼうっとしている。
残っている仕事の量を頭の中で見積もり、今夜も満足するほどには寝られないなと覚悟を決める。

そろそろ、五時か……窓の外を見ると、すでに明るくなってきている。
和磨は専務室に設えられている洗面所に入り、冷たい水で顔を洗った。専務室に専用のトイレと洗面所が設置されているなんてと、最初見たときには呆れたが……いまはありがたい。
気分がすっきりし、和磨は身繕いをして外に出た。
会社の近くにあるコンビニで、腹持ちのいいドリンクゼリーとお茶を買う。
昨日の昼飯もここで買った。特別このコンビニが好きなわけではない。もう少し足を伸ばせばレストランや喫茶店もあるようだが、いまの和磨にそんな余裕はない。
まったく不便なところだよな。会社の近くに、コンビニ一軒しかないなんて……
よし！　まずは何より、社員食堂を作るとしよう。和磨はそう心に決めた。

腹をそれなりに満足させ、一心不乱に仕事をしていた和磨は、ノックの音に上の空で返事をした。
「入ってもよろしいでしょうか？」
やたらもったいつけた、和磨の癇に障る話し方の女だった。彼の「どうぞ」という了承を得、ドアが開いた。
「おはようございます。高杉専務」
高杉というのは、母方の苗字だ。和磨は無用なトラブルを避けるために、ここでは高杉を名乗っていた。朝見を名乗ると仕事がしづらい事情があるのだ。
「ああ。なんだ？」

和磨は顔も上げずに返事をした。
「わたくし、高杉専務の専属秘書を務めさせていただくことになりました……」
は？
「専属秘書？」
寝耳に水の話に、怪訝な声を上げてしまう。
「はい」
和磨は顔を上げ、目の前にいる相手を見た。視線が合ったかと思うと、気取った笑みを浮かべる。
和磨は頬を引きつらせた。毒々しい気が、自分に向けられている感じがして、思わず顔を逸らす。
「これからよろしくお願い致します」
「必要ない！」
相手の言葉を跳ね返すように、和磨は鋭く言った。
「はい？」
女はぽかんとする。
和磨は苛立ちを感じ、さらに語気を強めた。
「専属秘書など必要ないと言ったんだ。出て行ってくれ、仕事の邪魔だ！」
女の表情が醜悪に歪んだ。そして、憤った足取りで出て行った。
しばし思案した和磨は、立ち上がって専務室を出た。目指す場所は社長室だ。
伊藤社長は、今日の仕事の段取りを秘書に口頭で報告させているところだった。秘書は、突然現

れた和磨を見て、恥ずかしそうに頬を染め頭を下げてきた。
先ほど和磨のところに来た女とは違い好感が持てる。こちらは有能そうだ。
「疲れているようだね。大丈夫かい、和磨君？」
「ええ、まあ。昨夜はほとんど徹夜でしたので……。それよりご相談したいことがあるのですが、人払いしていただいてもよろしいでしょうか？」
「ああ。構わんよ。……新山君」
「はい。それでは、失礼致します」
ドアが閉じる音を聞いてから、和磨は伊藤に向き直った。
「いい子だろ。もしかして気に入ったか？　よければ君の秘書に……」
冗談だとわかったが、いまはそんな気分ではない。
「ご厚意はありがたく頂戴しますが、私に秘書は必要ありません。先ほど、私専属の秘書になったという者がやってきたんですが……それについて、ご存知ですか？」
「いや……知らないな。いったい誰の指示だろうな？」
やはり、知らなかったか……伊藤は和磨をよく知っている。あんな人選をするわけがない。とすると……いったい誰が？
「和磨君、わざわざここまで来たのは、その確認だけではないのだろう？」
さすが、聡いな。
「ええ。秘書課を解散させます、とお伝えにきました」

「ああ、やはりそうか。私もあの課は必要ないと思う。だが、私には秘書をつけてくれるんだろうね？」
「それはもちろん」
「よかった。スケジュール管理から、全部ひとりでやらなきゃならないのかと、冷や汗が出たぞ」
この冗談には、和磨も笑ってしまった。
「社長室付きの秘書を、ご自分で人選してください。今日中に人事部に直接ご返答をいただければ結構ですので」
「では、秘書課はさっそく明日解散か？」
伊藤の表情から、彼が解散させることに反対を感じていないのがわかり、和磨はほっとした。
秘書課は美女ばかりだ。前社長と同じく、伊藤も秘書課を気に入っているとすれば、いささか厄介だなと懸念していたのだ。
「秘書課の者たちの能力のほうは……どうですか？」
「使えるのもいるよ。先ほどの新山君とかね。和磨君、君も秘書がいたほうがいいぞ。何もかもひとりでしていたら、疲労で倒れかねない。そんなことになったら大変だからね。新山君は、どうだ。彼女は役に立つよ」
秘書課は十人いる。六人を他部署の穴埋めに回すとすれば、四人が残る。新山には秘書としてではなく、私の仕事を手伝ってもらうのもいいかもしれないな。とにかく秘書室を空けないことには、和磨の計画は前に進まない。そして、大事なことがあとひとつ……

「私の仕事の補助をしてくれる部下が六名欲しいんです。人選は済んでいます。その者たちが抜けた穴埋めに、秘書課の者を回すつもりです」
「有能な者ばかり、引き抜くつもりじゃないだろうね？　さすがに、社内の仕事が立ち行かなくなるようでは困るよ」
「それほど無茶な人選はしていないつもりですよ。……他のところから有能な者を連れてくることもできますが……この社を変える仕事は、ここの社員に手伝ってもらったほうがいいと思いませんか？」
「まあ、それはそうだな。余所者が乗り込んできて改革したのでは、ここの社員がおいてけぼりになりそうだ」
　和磨は伊藤に向けて頷いた。
「問題が起こるようであれば、その都度対処します。明日、人事異動の辞令を出して、一日猶予を与えて引継ぎをしてもらい、明後日から本格的に動きます」
「ああ。了解した。それと今後、私にいちいち断る必要はないよ。ここの改革は君の好きにやってくれたまえ。私のほうには、適宜、経過報告をしてもらえればいい」
「わかりました。それでは失礼します」

　雑務は多かったが、和磨は人の手を借りることはしなかった。これからのことを、すべて自分で把握しておきたかったのが一番の理由だが、いちいち説明するのも面倒だった。

　正直、ひとりのほうが気楽だ。
　仕事がこれほど膨大でなければ、部下など持たずに、すべてひとりでやりたいくらいだ。
　和磨は手元の書類を取り上げる。
　改造企画部。和磨がこの社の改革のために立ち上げる部署の名だ。新山には、改造企画部の雑用として働いてもらうとしよう。

　昼のチャイムの音を、上の空とはいえ耳にしたからか、和磨の腹の虫が派手に不平を言った。
　身体を起こし、思い切り背筋を伸ばす。
　また、あのコンビニの世話になるか……と考え、和磨は部屋を後にした。
　六階で乗り込んだときエレベーターは空だったが、各階に止まり、人数を増やしていった。
　和磨は人が乗り込んでくるごとに後方へと下がった。
　二階でも扉が開き、女子社員がひとり乗り込もうとする。混んでいるのを見て、いささか躊躇したようだが、そっと一歩踏み出し、重量オーバーのブザーがならなかったことにほっとした様子だ。
　和磨は目を細めた。
　おかしなことだが、彼女の全身から透明な眩しい光が発せられたように見えたのだ。
　その直後、ブザーが鳴った。彼女はハッとして後方に振り返る。
「野本さん」
「残念、僕は拒否されたな」

野本と呼ばれた男は、笑いながら数歩後ろに下がる。
「僕は階段で行く。芳崎さん、下で会おう」
その声はエレベーター内に響き、扉が閉まった。
芳崎……
和磨は、身体に感じる馴染みのない感覚に身を震わせた。
芳崎という名の女性から、なんとも形容しがたいものが和磨にダイレクトに流れ込んで来た気がし、おかしな高揚感に囚われる。
芳崎は視線を斜め下に向けている。長めのストレートの髪、アーモンド形の目はきっちりと二重のラインを描いている。
彼女のつややかな髪に、和磨はいますぐこの手で触れたかった。
和磨の位置からは、まつげに半分隠れた瞳は少ししか見えず、知らず彼女の瞳を覗き込もうとしている自分に気づき、気まずくなる。
エレベーターが開くと、彼女はすぐ外に出た。そこには先ほどの、野本という男が待っていて、彼女にやさしげな笑顔を向けていた。
後ろ姿で確められなかったが、彼女も野本に笑みを返しているに違いない。
これまで感じたことのない不快な感情に胸が圧迫される。
嫉妬……？　まさか……
いま感じたわけのわからない感情を、和磨は心の中から追い払おうとした。けれど彼の視線は、

彼女の虜になったように吸いついて離れない。
どうやら、そのふたりの目的地は和磨と同じらしい。コンビニに向かって歩きながら、楽しそうに語らうふたりのあとについていくことに、和磨は屈辱のような感情を抱いたが、だからといって目的地を変えることもできなかった。
彼女がそうさせるのだ。見えない糸で、俺を絡め取ったかのように自由を奪われる感覚……
和磨はイライラしてきた。束縛されるのは大嫌いなのに。
コンビニに入ると、野本は当然のようにカゴを持ち、彼女はそのカゴの中に、小さなメモに目を通しながら品物を入れていく。ふたりの行動は慣れたもので、その親密さに苛立ちが増す。
「困ったわ。奈々ちゃんから頼まれた菓子パンがないみたい」
「なんでもいいよ。島津さん、この間これ食べて美味いって言ってたし、これでいいんじゃないかな」
「ないものはないんだから、それでいいですね。それじゃ、あと松野さんに頼まれた……」
「松野は弁当だったな。先に温めてもらっとくから、芳崎さん、君は飲み物を頼むよ」
「わかりました」
寄り添っていたふたりが離れ、別々の方向に向かうのを見て、和磨はせいせいした。
いまの話ぶりだけでは、ふたりが恋人関係かどうか判然としなかったが、少なくとも人目も憚らず、べたつくような間柄でもないようだ。
自分にもチャンスがあると考えた和磨は、ぎょっとした。

俺ときたら、何を考えてる？　会ったばかりの女相手に……
和磨の理性が息を吹き返した。飲み物の棚からジュースやウーロン茶を取り出している芳崎の後ろ姿を一瞥した和磨は、彼女から離れた。
ふたりがコンビニを出て行ってから買い物を済ませ、和磨は会社に戻った。

頭を冷やして冷静になるべきだ。和磨の理性がうるさく忠告する。けれど和磨は、やらなければならない仕事を放り出したまま、社員名簿を捲るのに夢中になっていた。
これだ！　芳崎真子。二十三歳。
和磨は彼女の写真に見入った。少女っぽさの残る顔。たぶん入社当時のものだろう。ポニーテールにしているため、細い首が際立っている。
俺がここに唇を這わせたら、彼女はどんな表情をするだろうか？
和磨の胸に甘いものが満ち、それと同じくして苦いものが込み上げてきた。
野本という男の存在……
和磨はさらに名簿を辿り、目的の人物を探し当てた。
半年前に中途採用で入社している。履歴は文句のつけようのないもので、以前勤めていた会社はかなりの大手だ。そこを辞めて、なぜここに入ってきたのだろう？
アサミテクノは、その名を聞けば誰もが頷く朝見グループの関連会社とはいえ、末端に過ぎない。拓海の経歴から見て魅力的、とはなかなか言い難い。

真子と拓海の所属する情報システム部からもひとり、和磨の部下になる者がいたはずだった。
和磨は机の上におかれた書類から一枚抜き取って確かめた。
松野圭太、か。
和磨は、松野圭太の名前に取り消し線を引き、そこに野本拓海と書き込んだ。
仕事に対して私情を挟む人間を毛嫌いしていたのに……いまの自分は感情に抗えなかった。

その夜も、和磨は会社で夜を明かした。伊藤社長から、社長室にシャワーの設備があると聞いて使わせてもらった。
専務室のソファでの仮眠では、思うように疲れが取れない。この二日間の疲労は、そろそろピークに達しそうだった。だが、今日仕事を軌道に乗せられれば、今夜こそ、ホテルのベッドでゆっくり休めるだろう。今日一日が勝負だ。
始業間近になって仮眠から目覚めた和磨は、そう自分に活を入れた。
新しいシャツとスーツに着替え、またコンビニに向かうことにする。
会社のロビーは、出勤してくる大勢の社員でごった返していた。エレベーターを待っていた者の中に、福永がいた。彼は社長と同時にここに常務として就任した。もともと本社の人間なので、和磨にとっては旧知の仲である。
「やあ、朝……、た、高杉専務」
「おはようございます」

「どうだね。仕事のほうは……」
「順調に進んでいます」
「そうか。頑張ってくれたまえ」
「はい」
福永と一緒にいては、名前を偽っているのがばれる危険性がある。
頭を下げた和磨は、その場を早々に後にした。
コンビニに向かって歩きながら、真子のことを考える。
次に真子に逢えるのはいつだろう？
脳内ではすでに、芳崎真子のことを呼び捨てにしている自分を、和磨は笑った。
適当な理由をつけて、彼女の部署に行ってみようか？
そんなことまで考えてしまう和磨だが、現実にはそんな暇など、まったくないこともわかっていた。
和磨はため息をつき、コンビニの中に入ると、飲み物の陳列されている場所に向かう。
そこには先客がいた。その後ろ姿を確認した和磨の心臓は、大きく跳ね上がった。
神様というのは、存在するのかもしれない。にやついて考えた和磨の頬は、自然と緩む。
何かを探しているらしい真子に躊躇なく近付いた和磨は、彼女と飲料棚の間に、自分の身体を滑り込ませた。真子との接近に、胸が高鳴る。
低い位置にあるドリンクゼリーを掴んだ和磨は、上体を起こしがてら真子に顔を向けた。

「失礼した」
彼が狙った以上に、真子の意表をついたらしい。驚きの表情で和磨を見つめる真子に、彼は満足を得た。
いま初めて、真子の意識に自分が入り込んだのだ。
この瞬間をどれほど待ち望んでいたかを改めて認識しながら、和磨は彼女の瞳を食い入るように見つめた。まるで、真子の意識の奥深くまで、彼の存在を強烈にねじ込もうとでもするように……
「いえ」
真子は返事とともに、顔を伏せた。
和磨は俯いた真子の顔をつぶさに眺めた。
瞬きを繰り返すたびにソフトに揺れる睫毛。やわらかなカーブを描く頬のライン。薄くルージュの引かれた唇の艶と形が心をそそる。彼女に触れたい衝動を、和磨はぐっと抑えた。
そのとき、真子が「あ」と小さな声を上げた。
彼女が見つめているのは、和磨の持っているドリンクゼリー。
「君もこれを？」
真子のほうに差し出しながら問う。
「あ、……は、はい」
躊躇うように返事をし、彼女はおずおずと手を差し出してきた。
すると、悪戯心がむくむくと湧いてくる。

和磨は、真子の手が触れる瞬間、ゼリーを自分の胸元まで上げた。思惑通り、驚いた真子がドリンクゼリーにつられて顔を上げる。彼女の顔を見つめ、和磨はほくそ笑んだ。
戸惑う表情もいいな。
だが、できるならば、俺に向けて微笑んでくれればよかったのだが……
昨日、野本という男に向けていたであろう、笑み以上に……
そんな和磨の胸中も知らず、真子は戸惑いを深め、差し出していた手をゆっくりと引いてしまう。
和磨は、さっと真子の手を取ったが、その瞬間、大きな衝撃を受けた。触れ合った部分で、何かが起こったのだ。
彼の内側で何かが膨れ上がり……ふたりの身体全体を一緒くたに包み込んだような……
彼女は俺のものだ……そう、はっきりと悟る。
衝撃と、極度に速まった鼓動を感じながら、和磨は彼女の手のひらを上に向け、ドリンクゼリーをおこうとした。
だが、彼女は唐突に手を引く。和磨の手をすでに離れていたゼリーは、当然、落下した。
どうして手を引いてしまったのか……
和磨は怪訝そうに彼女を見る。
ふたりの目がかち合ったが、なぜか彼女は、びくりと怯えた目をする。そして、手にしていた品物を棚に突っ込み、飛ぶように逃げて行った。
しばらくの間、和磨は呆然とし、彼女が消えた方向を見つめていた。

なんで逃げたんだ？　わけがわからない。俺が何をした？
和磨はむっつりとして口元を引き締め、床に屈み込んで落ちたドリンクゼリーを拾い上げた。

3　遭遇の余波　～真子～

コンビニから飛び出した真子は、激しい動揺に我を忘れたまま走り続けた。
走りながら、先ほどの出来事が頭の中でぐるぐる回り、動揺が収まらない。
あの人はいったい誰……？
い、いや、そうじゃない。誰とかじゃなく……そ、そう、ただの通りすがりの人よ……たまたまコンビニで遭遇しただけの……
なのに、どうして自分はあんな反応をしてしまったんだろう？
なんだか凄く怖くて……だから怯えちゃって……けど、怖いの種類が……なんか違ってたっていうか……ああ、何を考えてるんだ、わたし……頭の中がグシャグシャで、全然まとまらない……
エントランスに飛び込み、真子はその勢いのまま階段を駆け上がり更衣室に飛び込んだ。
始業時間十分前。更衣室は満員状態だった。
馴染みの顔を見て、極度の緊張から解放された途端一気に安堵が押し寄せる。
「まーこ、おっはよう」

いつも出社ぎりぎりの奈々子も珍しいことにすでに更衣室にいて、愉快そうに真子をからかう。
「わたしのほうが早いなんて、こんなこともあんのねぇ。でもまだ十分くらいあるよ。そんなに急がなくても大丈夫だって」
「ハァハァ、そうだね……ハァハァ、あー息、苦しい」
息切れしつつそう答えた真子は、大きく息を吸って呼吸を整える。
火がついたように頬が熱い。走ったためと思ってくれればよいのだが……
先ほどの男の人と触れ合った彼女の手は、いまだに軽く痺れ、ジンジンするような感覚が残っている。
彼の手に触れた瞬間、自分の背筋を走った強烈な震えは、いったいなんだったのだろう？
真子は彼の眼差しを思い出して小さく震えた。
何もかも見透かしたような瞳……ふるっと震えてしまい、真子は自分を落ち着かせた。
通りすがりの人よ。もう二度と会うこともない。
そう考えたら、おかしなことに、すっと心が冷えた。
な、何、この感覚……怖かったし、だから逃げてきたんだし……
ああ、もおっ。ほんと、自分がわからない。
何か、おかしな魔法でもかけられ……いや、いくらなんでも魔法はないか……なら催眠術をかけられたとか？　けど、それって、どんな催眠術？
真剣にそんな馬鹿なことを考えている自分にはたと気づき、真子は顔を赤らめた。

あー、もう、やめやめ！　あの人は通りすがりの人。もう会うこともないの。
はい！　あの人について考えるのお終いっ！　真子は自分に強く命じた。
自分を悩ます男を頭から追い払った真子は、古びたロッカーの鍵を慣れた手つきで開ける。この鍵は古いせいで、開けるのにはコツがいった。
この会社の備品は、どれもこれも創業時のものではないかと思うくらい古めかしい。赤錆がところどころについたロッカーも、更衣室の室内の壁も、掃除が行き届いているにもかかわらず、薄汚れた雰囲気が拭えない。その代わり、お客様が出入りする範囲は見事なほど近代的で、一階のエントランスやロビーなどを見ると、この更衣室の有様など想像も及ばないだろう。だが、これが現状だった。
パソコンやコピー機などは、仕事に差しつかえるので新しいものを支給されているが、机や椅子は、さすがにこれはないだろうと首を振りたくなるくらい古ぼけたものまで、いまだに使用されている。
「うちの会社、どんどん変わっていくね」
ロッカーの塗装の禿げた部分に視線を向けていた真子は、その興奮した声に顔を上げた。
「ほんと、なんか嘘みたいだよね。独断と偏見の塊みたいなワンマン社長が一ヶ月前に急死して、新社長が親会社からやってきて、社内の雰囲気は劇的に変わってさ」
新社長は、それまでの体制を抜本的に見直し、改革しようとしてくれている。だが、まだまだ問題は残っているようだ。元社長に取り入っていた専務と常務は、すでにこの社にいないのだが、新

社長の改革を、快く思っていない者も少なくないらしい。
「新しい役員も入ってきたんだし、きっともっとよくなるよね」
「ところで、専務殿の実物を拝んだ子、いる？」
奈々子が更衣室にいる全員に問いかけたが、皆首を横に振る。
「昨日から出社してるはずなのに、正式な挨拶とかも、なしだったもんね」
「まさか人嫌いとか？　雲上の六階に、ずっと引きこもっているつもりじゃないの？　ちゃんと仕事してくれるのかな？」
「やだー、引きこもり専務とか、ありえないしぃ」
その言葉に、場がどっと沸く。
「けどさ、あの人格者と評判の伊藤社長が、能力を認めて引き抜いてきた人なんでしょう？　だったら、期待していいんじゃないかと思うけど」
真子もそう思う。
それきり、専務についての話は立ち消えた。真子は、時間を気にしつつ制服に着替える。
「ところでさ、秘書課の堤さんだけど、新社長からご指名を貰えなくて、めちゃくちゃ苛立ってるって、ほんと？」
「うん、本当らしいよ。社長さん、秘書課の全員の能力を見させてもらうとかって、テスト期間を設けたんだって。新入りの深田ちゃんを捕まえて聞いたら、教えてくれた」
「深田ちゃんかぁ。あの子、まだ入社したてで、内情をまるで知らないだろうからね」

「秘書課の人たち、悪い人ばっかりじゃないんだけど……多かれ少なかれ、自分たちは選ばれし者みたいな意識を持ってるよね」
選ばれし者……か。真子の脳裏に、同期入社で秘書課に配属された新山恵美が浮かぶ。入社時に何度か話したことがあるのだが、理知的で性格もよかった。新山が秘書課に配属にならなければ、親しくなれたかもしれない。だが、秘書課と真子の配属されたシステム部とは、まったく接点がない。同じ会社に勤めていても、会うことは稀だった。
「社長さんのテストに、元社長秘書の堤さん、合格すると思う？」
「どうだろうね。あの人、実際に秘書の能力があるのかないのか……さっぱり」
「男に貢がせる能力は、馬鹿高いようだけど……」
「確かにぃ」
皆苦々しい表情を浮かべている。
堤は男性社員にはもてはやされているようだが、女子社員には物凄く嫌われている。
「堤さん、さっさとこの会社辞めて、グラビアモデルにでもなればいいのに」
「あの人、性格は最悪だけど、見た目だけはいいからねぇ。男どもがちやほやしてるの見ると、ムカついてならないわ」
「ひがむな、ひがむな」
奈々子が、笑いながらおちょくる。
「もおっ、島津さん、ひどーい」

「皆、聞いて聞いて！」
突然ドアが開き、飛び込んできた女子社員が大騒ぎする。
「ど、どうしたのよ？」
「専務らしき人を見たの。すっごいイケメン」
その情報に、皆の目の色が変わる。
「イケメンって……いったい幾つくらいの人だったんですか？」
「専務って、社長くらいのおじさんじゃなかったの？」
「違う。三十前後に見えたよ。所帯じみてなかったし。もしかしたら独身かも」
独身という言葉に、どよめきが上がった。そして一気に興奮した空気になる。
「うわーっ、こうしちゃいられない。どこにいたのよ？」
「玄関ロビーで見た」
更衣室にいた半分ほどが、ドタバタとドアを飛び出て行く。
「ちょっと、あんたたち！」
慌てて手を伸ばし、奈々子は皆に呼びかけたが、誰も振り返らない。
「もう仕事始まるって……聞いちゃいない」
皆行ってしまい、奈々子は呆れて手を下ろす。
残った者たちもそわそわしている。こちらは皆後輩たちだ。
「ほんとに独身なの？」

奈々子が情報を運んできた女子社員に尋ねる。その子は必死に着替えているところだったが、興奮気味に目撃した専務について話してくれる。
「そんなの知らないわよぉ。でも背が高くて脚が長くて、すらっとしてて、キリッとしてて、眼鏡かけてて、なんか視線だけで心臓バッキューンって感じだった」
「なんじゃそりゃ」
奈々子が眉を寄せて呟く。そのあとも、更衣室は専務の話題で持ちきりだった。
「皆、あと二分だよ」
脱いだ服をハンガーにかけ、ロッカーを閉めたところで、奈々子が皆に声をかけた。
途端におしゃべりをやめ、皆更衣室を出て行く。それに続こうとした真子は、「あっ！」と叫んで足を止めた。
「眼鏡するの、忘れちゃってた」
「眼鏡？　あんたコンタクトでしょ？」
「今朝寝坊して、つける暇がなかったの」
真子は急いでロッカーを開け、バッグの中を探したが、眼鏡はなかった。
「しまった、眼鏡のケースを入れてなかったわ……どうしよう」
「あっ、それならさ、吉田課長が三つくらい持ってたよ。なんか百均で売ってたって、えらく自慢してたし」
「奈々ちゃん……それ老眼鏡。わたしは遠視じゃなくて近視」

「え？　眼鏡って、種類が色々あんの？」
その問いかけに、頭痛を覚える。
「そう、色々あるの」
「あはは、そうなんだぁ。でもさ、眼鏡は眼鏡じゃんか。一度、課長に借りて試してみたら？　案外使えるんじゃないの？」
「あははは……」
乾いた笑いを漏らしてしまう。すると、奈々子まで笑いに参加してきた。
真子は笑いを引っ込め、奈々子の鼻の頭を思い切り弾いてやった。
「い、いったーい！　何すんのよっ」
「もう一度、中学校で理科の勉強やり直してこいっ！」
真子は力任せにロッカーを閉め、奈々子を無視して更衣室を出た。
「えーっ。どうしてよー？」
頬を膨らませた奈々子は、ぶつぶつ言いながら真子の後ろに続いた。

4　届け物の準備　～和磨～

専務室に戻った和磨は、仕事を開始して一時間半ほど息をつく間もなかった。

人事異動の辞令について、各部署の部長に宛てたメールの送信。
ついで、稼動開始に必要な書類の再点検。これには特に時間を割いた。
何事もはじめが肝心だ。ミスだらけの書類を部下に手渡すわけにはいかない。
はじめの印象というものは、事の最後まで影響を及ぼすものだ。説明しながらミスをいちいち訂正するようでは、部下の信頼を得ることは難しくなる。
そこで和磨の意識は、仕事からズレた。真子との出会いはどうだったろう？
肝心なはじめの出会いで、俺はミスを犯しただろうか？
和磨はソファに目を向け、自分の今日の昼食と一緒においてある品物を見つめた。これは、彼女が手に取っておきながら、逃げる前に慌てて陳列棚に押し込んでいった物だ。届けてやろうかと思って、買ってきたのだが……
真子に会いたい気持ちは募るばかりだったが、彼女のところに直接届けに行くのは……やはりやめておいたほうがよいだろう。また逃げられてしまうかもしれない……真子をぎょっとさせてみたいし、驚きの表情をこの目で見たいが、嫌われては困る。
それにしても、俺の何が怖かったというんだ？　紳士的に振る舞った……いや、まあ、ちょっとばかり、故意に近づきすぎたかもしれないが。それがよくなかったのか？
和磨は思案しつつ、机の上においた社内便の封書を見つめた。
とにかくいまは仕事をしなきゃな。真子のことを考えるのは、やらねばならないことを終えてからだ。

封書を掴み、彼はドアの外に出た。そこには社内便を入れるコンテナがあり、決まった時間に係りの者が取りに来て、社内へと配送してくれるのだ。
封書をコンテナの中に入れた和磨は、ひらめきを得て笑みを浮かべた。部屋の中に取って返し、電話の受話器を持ち上げて内線をかける。
「はーい。秘書課でーす」
耳にしたことのない声だった。のほほんとした口調で、いささか呆気に取られた。
「聞きたいことがあるんだが……社内便は封書しかないのか？　箱はあるのか？」
「はいはい。ちょっと待ってくださいね」
受話器を口元に当てたままらしく、大きな声で周りの連中に尋ねているのが丸聞こえだ。和磨は煩い受話器を耳元から離して待った。
「あるそうですよ」
「サイズを教えてくれ」
「……あ、はーい。えーっと」
社内便の詳細が書いてある紙でも受け取ったのか、ガサガサと紙が擦れる音がする。
「大、中、小の三種類あるみたいですよ」
「中の大きさは？」
「えーと、幅三十二センチ、奥行き二十六センチ、高さが十八センチですね」
「それでいい。それを持って来てくれ」

「はい……？　あの、どこに？　庶務課にありますので……」
自分で取りに行けと言いたいらしいが、こちらは専務、相手は秘書だ。秘書が動くべきだろう。
まあ、この電話の相手は、電話してきた相手が専務だとは気付いていないようだが……
「君が持ってきてくれ。専務室だ」
この電話の相手が、どんなやつなのか確認しておきたい。
「ええっ。専務室は駄目ですよ！」
「それは、どういうことかな？」
「だって、専務室には、すっごい怖い専務さんがいるんだそうですよ。……あれ？　あなた、もしかして、いま、専務さんの部屋にいるんですか？」
「ああ。いるけど」
何せ、この俺が、その怖い専務さんだからな。
「怖いもの知らずですねぇ。あ、えっ、先輩、なんなんですかぁ？」
その声は途中で遠ざかっていった。受話器は違う人物の手に渡ったようだった。
「わたくし、秘書課の中田でございますが……」
その声は、緊張で張り詰めていた。次の言葉を継ぐ前に、ごくりと喉を鳴らす音がする。
「高杉……専務でしょうか？」
「ああそうだ」
相手が大きく喘いだ。数秒沈黙が続き、和磨は苛立った。

「頼んだ箱を、至急届けてくれ」
ぶっきら棒に言い放ち、和磨は返事も聞かずに受話器をおいた。
二分を超えない速さで、箱は和磨のもとに届けられた。
「先ほどは、秘書課の者が大変失礼を致しまして、申し訳ございませんでした」
青い顔で恐縮したように頭を下げてくる。
「別に気にしていない。ありがとう。ところで、君の前に私の電話を受けたのは、誰だったのかな？」
「あ……はい。……深田……と申します」
彼女は歯切れ悪く答える。深田の心配をしているようだ。
「気にしないでくれ。名前を知りたかっただけだ。もう下がってくれていいよ」
「はい。それでは、失礼致します」
ひとりになり、和磨は急いで箱を組み立て、品物を入れていった。真子の驚く顔を想像し、和磨はにやついた。

5　ありえない登場　～真子～

午前中の業務を折り返す頃、真子はいつもの十倍は疲労していた。コンタクトをしていないせいで、視界がぼやけているし、パソコンの画面も見づらく、目だけでなく肩までカチカチに凝ってしまっている。
「どうしたの。そんなにパソコンに齧りついて。芳崎さん、よほどお腹空いてるの？」
拓海の的を射たからかいに、真子は笑みを浮かべた。確かにすきっ腹である。
「お腹空きすぎて、キーボードが板チョコに見えます」
「なんだ、朝飯食べてないのか？」
真子は頷いた。コンビニで、ドリンクゼリーや菓子パンを買って食べようと思っていたのに……あの男の人と遭遇したせいで、買ってこられなかった。
「ダイエットか？　そんな必要ないだろう？」
「そんなんじゃないです。ただ、寝坊しただけです」
真子の告白に拓海は苦笑し、スーツのポケットの中をあさり始めた。
「ほら」
差し出された手のひらの上には、チョコやキャンディーらしき小さな包みが三つ。
じっと見つめていると、拓海は真子の手を取り、手のひらの上においてくれる。
コンビニのときと同じシチュエーションで、一瞬どきりとする。けれど、コンビニのときとは違い、背筋に震えが走ったり、手がジンジンすることはなかった。
あのおかしな反応……相手があの人だったから、なのかな？
落ち着かない気分になる。あの人とは、もう二度と会うこともないのに……

わたし……おかしいよね。たまたま偶然会っただけの相手を、どうしてこんなに気にするの？
「さっき、庶務課の子にもらったんだ」
ずっと包みを見つめていた真子は、拓海の声にハッとして顔を上げた。
「あの、ありがとうございます。でも、わたしがもらってしまっていいんですか？」
これは、拓海に思いを寄せている子が、彼に食べてほしくてくれたのかもしれないのに……
「僕はそんなに甘いもの食べないんだ。けど、くれるというものを受け取らないのも悪いと思ってもらっただけだから。ほら、食べて」
庶務課の子に悪い気もしたが、せっかくの拓海の厚意だ。ありがたくいただくことにする。
「真子、カフェオレ買ってきたよ。はい」
「ありがと。奈々ちゃん」
「これで芳崎さんのお腹の虫も、昼までおとなしくしててくれそうだな」
そうだ、お昼……あの人、またあのコンビニにいたりしないかしら。
期待している自分に真子は眉をひそめた。わたしってば……逃げたくせに……
ああー、もおっ、自分でもわけがわからないわ。
「芳崎さ～ん」
呼びかける声に振り返ってみたら、同じ部署の女子社員に大きめの社内便の箱を差し出された。
「えっ、これって？」
「社内便です」

それは見ればわかるけど、なぜわたしにこんなものが届くのだ。これまでこんなことは一度だってなかった。
「何かの間違いじゃない？」
「でも、ちゃんと芳崎さんの名前が書いてあるんですよ。受け取ってもらえないと、わたしも困るんですけど」
そう言われると受け取るしかない。差出人が誰か確認しようとしたが、記載されていない。
「これ、いったい誰から……？」
「あらら？　おかしいですね。差出人が記載されてないと、社内便は出せないはずなのに……」
「な、なんか……開けるのが怖いんだけど……」
ふと見ると、奈々子と拓海が興味津々で箱を見下ろしている。
「開けてみればいいじゃない」
「で、でも……」
「よし。わたしが代わりに開けてあげるよ」
奈々子は躊躇なく開けてしまう。
「何これ？」
箱の中から奈々子が取り出したものを見て、真子はひっくり返りそうになった。
菓子パンがふたつとウーロン茶、そしてドリンクゼリー……すべて真子があのコンビニで買おうとしていたものだ。

ありえない！
真子の全身に鳥肌が立った。

昼の休憩時間。真子は、奈々子と松野が買って来てくれたサンドイッチを食べていた。差出人不明の品は、結局手を付けられずにそのままだ。
もちろん毒など入っていないだろうけど……とにかく謎だらけで気味が悪い。とは言っても、差出人として考えられるのはひとりしかいない。――そう、あの男の人だ。だって、わたしが買おうとして手に持っていたのを知ってるのはあの人だけ。
あの人って……いったいぜんたい何者なの？　ただの通りすがりの人ではなかったの？
こうして社内便で届けてくるということは、この会社で働いていて、わたしを知っているということだ。名前も部署も……
拓海も奈々子も松野も、真子に届いた謎の荷物のことを、気にかけてくれている。けど、コンビニで会った男の人からだなんて、言えるはずもない。
こんな届け物が来て、最初は度肝を抜かれたけど……いまはドキドキしてる。あの人に、また会えるかもしれないって、期待してる。なんかなぁ、もう自分で自分の気持ちがわからない。
さらにおかしなことに、時間が過ぎるほど、あの男の人の記憶が、鮮明になっていく。
コンビニの飲料の棚のところで目的のものを探していたら、突然目の前を掠めた人の影。
その人は、前屈みになっていた身体を起こしながら、真子に振り向いた。そして……『失礼した』と、口にしたのだ。心に沁み込むような、低くよく響く声だった。その短い言葉にぞくりとして……
眼鏡の奥の目が鋭くて、その目に見つめられるのが怖くなって目を伏せた。でも、じっと見つめられているのは気配で分かった……それから真子の心臓は暴走し始めた。
そこで彼が、真子が買うつもりだったドリンクゼリーを手にしていることに気づいて……
ふたりの目が合ったのだ。
真子の脳内で、その人の容貌が浮かび上がる。
整った顔立ち、すっきりとした目と意志の強そうな口。そして、刺すような瞳の光。
そのあと、手に触れられたのだ。
拓海がしたように……真子の手を取り、上に向けてドリンクゼリーをおこうとした。でも、彼の手に触れた途端強烈な震えが背筋に走って、反射的に手を引いてしまった。そのせいでドリンクゼリーは落下して……なんだかその場にいられなくなり、逃げたのだ。
自分の手のひらを見つめていた真子は、無意識のうちにもう片方の手でそっと触れていた。あの男の人が触れたように……
「おい皆、話がある。こっち向いてくれ」
吉田課長が皆に声をかけてきた。昼休みも残り五分というところで、社の外に昼食を食べに出かけていた者も全員戻って来たところだった。

「人事異動の辞令が出た」
真子は突然のことに驚いた。周りもざわめき始める。
この時期に人事異動など例がない。なぜいま？
「親会社から、新しい専務が来たことは皆知ってるだろう？」
皆めいめいに頷く。
吉田課長は、持っている書類を捲りながら説明していく。
「専務は、この会社全体を改造するつもりらしい」
「改造ですか？」
拓海が興味を見せて課長に尋ねる。
「ああ。大改造をするらしい。組織図や人員配置の見直しから、改装工事に至るまで。専務は……えーと『改造企画部』という部署を設けるとのことだ」
「改造企画部？　へーっ、なんかかっこいいな」
愉快そうに笑いながら、松野が言う。
「まずは仕事に支障のないよう、順次一部署ごとにフロアの改装を始めるらしい」
その報告に周りがざわめいた。改装が始まると知り、皆瞳を輝かせている。どの程度の改装かはわからないが、確実にいまよりよくなるはずだ。
「それと」
吉田の大きな声に、皆が口を閉じて注目する。

立ち読みサンプルはここまで

「資格の取得推進もするらしい。届出書がここにある。申し込んで受講して、受講終了証を提出すれば、費用は全額、会社が負担してくれるそうだ。詳しいことはこの書面とこの冊子に書いてある。芳崎君、これ皆に配って」
真子は課長から分厚い冊子を受け取り、皆に一冊ずつ配った。
奈々子は興味なさそうだが、真子はわくわくしていた。タダで資格を取得できるなんて、願ってもない大チャンスではないか。
「おーい、話はまだ終わってないぞ。静かにしてくれ」
ざわついていると、吉田が大声で注意する。ピタリと静かになった。
「改造企画部に、各部署からひとりずつ異動になることになった」
「異動？　それって、この部署からも行くってことですよね。いったい、誰が？」
奈々子が聞く。資格の本などより、よほど興味があるといいたげな表情だ。
「野本君だ」
えっ？　真子はドキリとした。
の、野本さんが異動になるの？
それは、大問題だ！　彼がやっている仕事を、いったい誰がやるというのだ？
「僕……ですか？」
「ああ。急なことだが、明日からあちらに行くことになる。君の仕事は……芳崎君」
「は、はいっ」